

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成17年4月5日発行(毎月5日1回発行)
第45巻4月号(通巻549号)

風土



4

1107

椿 咲 く 神 蔵 器

良寛のいろはにほへと椿咲く
日を溜めて土の笑窪にクロツカス
水口へ向き寒鯉のあたたまる
父のごと声かけてくる冬木立
水温む鍬の楔に水打つて

薄氷の消ゆる筋目に亡母のこゑ
正夢の夢入れ替はり冴返る
空動く二月はわれが生れ月
一つ掌に二つ野におく露の臺
白波の抱擁解くや海苔を搔く
春一番怒濤を前に句碑の建つ
句碑建つやのつこむ鯛のまくれなゐ

伊東海津美神社に師弟句碑 二句



竹間集

同人作品



はやり唄

田村すゝむ

雪の降る町や昭和のはやり唄
ロシア館に雪の匂ひのバラライカ
傘閉ぢて開きて牡丹雪払ふ
雪の丸窓芬陀院雪舟寺
もう少し生きて憚る竜の玉
寒中の奈落を支ふ真ん柱
沖繩に住みて用なき氷点下

湧水に

瀬戸

悠

日の中に浮ぶ綿虫七七忌
風通ふ枯鶏頭の高さかな
啓蟄の沖に金星またたきぬ
夕焼の遠き一樹や節分会
人来てはしばしとどまる冬泉
入院の長子従へ雪の果
湧水にをどる小石や春立てり

初詣

塩田

博久

駐車場に笛鳴りやまず初詣
駅に買ふスタンプノート初詣
笹鳴や朱印いたたく列につく
初雪や竹箒にて掃けば足る
駅へ行く朝の近道霜柱
着ぶくれて支払機への列につく
北の宿に冬濤聞きて足らひけり

礫岩の春

— 柴田由乃 —

御堂修復右近左近の梅三分
お大師の爪彫版木富士虱
ならひ吹く毘沙門天の下ぶくれ
紅梅の中の白梅神神し
春望や玉取竜の天井図
がうがうと風のとぐろや梅二月
雪富士を三面鏡にたたみけり
化粧水をたたく正面はだれ富士
ニッ月に入るや怒濤のはての島
菜の花や幸福地藏大菩薩

岬山の巢箱はどれも留守ばかり
波音にまさる風音木の芽晴
白妙の波立ち上がる春の岩
巖窟に鎮海の神鳥渡る
礫岩の春のぬくみを辿りけり
昼つ程川面湯気立つ花堤
吐き出せる山葵田の水わさび田へ
滝落ちてすぐに魚棲む川となり
鳥たちの空中滝浴び申の刻
滝暮れて魑魅魍魎の宴かな

山河集

同人作品



神蔵器選

葬果てて眼開けば雪降る山
回しつつ洗ふ空樽冬支度
丹沢嶺の窪みに落ちし冬至の日
冬雨の殊に明るき柞山村
村に入る菊蕪買の棹秤

天野みゆき

臘梅や色紙に真間の東歌

下山田美江

干葉吊るや代官屋敷の井戸屋形
管一本貨車の積みゆく鯽起し
競馬場跡の菩薩や冬菫
水音のスタツカートや枯蓮

黒板のサインコサイン年つまる
一つ売り一つを足せり飾売
ぼろ市の見返り美人と目が会へり

近藤幸三郎

火の気なき塗師の蔵に細雪
初風の流人の島に能囃子

寒雀降りて十羽の影生まる
ひとひらを追ふひとひらの冬桜
中村 洋子

初電話生後二十日の声を聞く
後楽園の田圃の中の霜柱
七草のすずしろばかり太りけり

野鍛冶絶え戸口へ雪の階刻む
命日の空おだやかに日脚伸ぶ
三猿も筵に並ぶ歳の市
工藤ミネ子

青柳寺にて
師の墓の万灯火をなせる寒椿
三椶の花暮れ残る墓域かな

◇特別作品◇

春雨の橋

橋添やよひ

湖の一枚風ぎや冬芽充つ
舟漕ぐは湖賊の裔か猫柳
湖の平らに青し初日かな
気まぐれに訪ふや水尾曳かいつぶり
浅春の湖へ迫り出す浮御堂
千体仏拝す手袋脱ぎにけり
春北風や見え隠れして湖中句碑
雲雀東風臥竜の松は湖を恋ひ

里坊の庭木のさわぐ比良風
逃げやすき狐格子の冬日かな
鐘撞いて比良の暮雪をさそひけり
水仙のゆるるさざ波曇りかな
ざうざうと明智の藪や寒の月
寒鴉啼くや光秀終焉地
清正楽美術館 二二句の茶碗所望の文寒し
笹子鳴く左入の銘の「草石蚕」かな
芽柳の風の尖りし「戻り橋」
寒灸の老舗や奥に人のこゑ
入学試験終へし子の眉やさしかり
三条大橋
春雨の橋よりつづく東海道

風土集



神蔵器選

元旦の圓平窯の粉引かな 東京 林 裕子

浜響二句

空碧し鷹の眼に焰立つ

風を斬る羽音かすめる放鷹会

越前の竹紙に雪の匂ひかな

雪折れの真竹にこ糸をかけ通る

品々や謂れをかしき節料理

調布

川井 政子

仏壇で色深めゆく青木の実

大寒や鏡くもらせ紅をひく

久女忌や和紙のつつめる冬灯

探梅行歸路の大きな夕日かな

東京

奥田 弦鬼

をけら火を時計回しに坂くだる

年明けの定家の墓に供花のなく

男子厨房に俎板始かな

指先に土陶工の二日かな

日向ぼこ膝にこぼれし金平糖

東京

柿沼 盟子

着ぶくれて席ゆるる機を逃しけり

葱牛蒡寄り添ひて立つ厨口

先端まで白き突堤冬の波

笹鳴や海を背にして磴昇る

花柄の杖つく友と日脚伸ぶ

横浜

中村 洋子

一本の藁を啞へし寒雀横浜

つまづきて弾みつきをり寒鴉

みささぎの磴に木洩日四温かな

初釜や「静」の一字の軸仰ぐ

平塚

中沢 三省

ユリノキも冬の一樹となりにけり

白秋の海を染めゆく初日かな

初荷船凍てし港の胸ひらく

仕事始胸のニトロ口を入れ替へる

万葉の植物園の返り花